

ゆるゆる空間、河川とまち
ゆるゆる

第30回

全国 サミット

in Okazaki

報告書

目次

I. 開催概要

全国川サミットとは	2
参加自治体紹介	3

II. 実施内容

現地視察	7
令和4年度 全国川サミット連絡協議会総会 次第	8
全国川サミット連絡協議会総会	9
国土交通省 講演	10
首長サミット	12
首長サミット(講評)	21
歓迎交流会	22
全国川サミット in 岡崎 開会式	23
事例発表	24
パネルディスカッション	27
サミット宣言～ 閉会式	35
全国川サミット in 岡崎 共同宣言	36

I. 開催概要

全国川サミットとは

全国川サミットとは、一級河川と同じ名称または一級河川の流域にある全国の自治体が「全国川サミット連絡協議会」を組織し、川がもたらす恵みや人々との関わりを活かしながら、川と共存するまちづくりを共に進めることを目的に、加盟自治体が持ち回りで開催しているものです。

回数	開催地	開催テーマ
第1回	富山県 庄川町	川は未来に夢はこぼす
第2回	北海道 鷲川町	きらめきリバータウン ～川と人の未来を求めて～
第3回	静岡県 大井川町	夢と希望あふれる川づくり ～川は命、未来の子供たちへ引き継ごう～
第4回	兵庫県 加古川市	川は友だち ～ひと・まち・川 ちよっと素敵な物語～
第5回	徳島県 那賀川町	未来へ語ろう！ 私たち川家族
第6回	秋田県 雄物川町	川がつなぐ「ひと・まち・こころ」
第7回	宮崎県 北川町	思い出っばい 不思議がいっばい ～川を彩るホテルの光が子供たちへの贈り物～
第8回	愛媛県 肱川町	21世紀へのメッセージ ～それは川から始まる～
第9回	三重県 宮川村	川に愛される人になりたい ～ちよっと素敵な川家族～
第10回	兵庫県 揖保川町	歴史に学び明日を見つめる川づくり ～ともに創ろう 川の未来 水の未来～
第11回	東京都 江戸川区	暮らしにとき込む、にぎわい川 ～都市の中の川を考える～
第12回	岡山県 加茂川町	森と川が伝える ふるさとのメッセージ ～水は生命の源～
第13回	奈良県 十津川村	みんなで考えよう！ 河川環境
第14回	兵庫県 猪名川町	清流とともに暮らす ～ええやん猪名川50年～
第15回	岐阜県 揖斐川町	川面に暮らし 川とともに生きる

回数	開催地	開催テーマ
第16回	東京都 江戸川区	川の恵みとその脅威
第17回	群馬県 みなかみ町	川を活かしたまちづくり・川と交流
第18回	秋田県 横手市	川がはくむ「ひと・まち・こころ」～山と川のあるまちから～
第19回	兵庫県 加古川市	川はともだち ～未来につなぐメッセージ～
第20回	新潟県 長岡市	絆～川は流れ、地域をつなぐ～
第21回	茨城県 取手市	川とつながる私たち ～水・命・文化・そして夢と未来～
第22回	長野県 川上村	流域文化に学ぶ
第23回	千葉県 香取市	歴史から学ぶ川と私たちの暮らし
第24回	新潟県 新潟市	川が創った大地 ～水と土が紡ぐ歴史～
第25回	福島県 喜多方市	上流は下流を想い、下流は上流を想う ～私たちの生活を支える大切な川～
第26回	高知県 四万十市	川とともに生きるまち
第27回	広島県 三次市	地域の誇れる川を未来
第28回	宮崎県 宮崎市	母なる川とともに
第29回	岩手県 一関市	黄金花咲く北上川 ～悠久の歴史と未来～
第30回	愛知県 岡崎市	河川空間とまち空間の融合 ～川の歴史の継承と新たな交流を目指して～

開催テーマ

河川空間とまち空間の融合 -川の歴史の継承と新たな交流を目指して-

乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画「QRUWA戦略」の主要プロジェクトである乙川かわまちづくりによる河川空間の活用が、新たなまちの風景と賑わいを創り出すとともに、乙川、そして岡崎に愛着を持ったファンを育てています。

また、水源の森から矢作川に合流するまでの流域全体が市域内にある乙川でのかわまちづくりは、水辺空間の活用にとどまらず、治水・利水・親水・

環境保全などの流域全体の課題解決に向けた活動にまで対象が広がってきています。

第30回全国川サミットin岡崎の開催を機に、まちと乙川とそれに関わる人々の魅力を発信するとともに、改めて川がもたらす恩恵とその裏に潜む課題について認識し、川に親しみ大切にする「川の関係人口」の創出に繋げていきたいと願っています。



岡崎市長 中根 康浩

参加自治体紹介

当市を流れる矢作川は、その源を中央アルプスの南端の長野県下伊那郡大川入山に発し、途中、乙川などの支流を合流し三河湾に注ぐ全長約118kmの一級河川です。古より親しまれたその流れは、江戸から明治にかけて三河地域の物流の動脈として舟運を発展させ、流域には20余りの荷物の揚げ降ろし場が設けられるなど、三河地域の発展に大きく貢献してまいりました。

そして、矢作川水系最大の支流である乙川は、岡崎城がある本市の中心市街地の中央を東西に流れ、四季の移ろいを際立たせる恵まれた自然や地形を有する一級河川で、東海道と舟運が交わる交通の要所として、このまちの繁栄に大きく寄与してきました。

開催市

愛知県

おかざきし

岡崎市



- 人口 / 384,996人 (令和4年4月1日現在)
- 世帯数 / 166,994世帯 ⇄ 面積 / 387.20km²
- 市区町村の木 / みかわくろまつ * 市区町村の花 / ふじ、さくら

特産品

- 石製品 ● 八丁味噌 ● 三河花火 ● 三河仏壇 ● 草木染
- 岡崎まぜめん ● 岡崎おうはん ● むらさき麦 ● 三州灯籠
- 三州岡崎和蠟燭 ● やはぎの矢 ● 五月武者絵幟

主な祭り・行事など

- 桜まつり (家康行列)
- 藤まつり
- 岡崎城下家康公夏まつり (花火大会)
- 岡崎城下家康公秋まつり
- 家康公生誕祭
- 瀧山寺鬼まつり
- 将棋まつり

岡崎市は、愛知県の中央に位置する人口38万人の中核市で、北から南に縦断する「矢作川」、東から西に中心市街地を横断する「乙川」が流れる水環境に恵まれた地にあります。

古くは岡崎城の城下町、東海道五十三次の宿場町、多くの寺院の門前町として発展し、江戸幕府を開いた「徳川家康公」の生誕地であることなどから、岡崎城を始めとする貴重な歴史・文化遺産に恵まれています。

さらには市の花にちなんだ桜まつり、藤まつりを始め、岡崎城下家康公夏まつり(花火大会)、岡崎城下家康公秋まつり、岡崎泰平の祈り、家康公生誕祭などのイベント等も多数開催されています。

令和5年1月から、NHK大河ドラマ「どうする家康」の放送を契機に、岡崎の魅力発信の起爆剤とし、多くのかたに岡崎へ足を運んでいただくきっかけとするために、1月21日の大河ドラマ館オープンをはじめ、全市を挙げて様々な取り組みを行っています。



岡崎 泰平の祈り (乙川)



岡崎城 (桜まつり)

秋 田 県



秋田県の内陸南部に位置する横手市は、東は奥羽山脈、西は出羽丘陵に囲まれた横手盆地の中央に位置し、横手川と流域面積全国12位の「雄物川」が貫流しています。

秋田県の中でも有数の穀倉地帯で、お米以外にもりんご、ぶどう、さくらんぼ、スイカ、しいたけなど、たくさんの農産物が自慢です。また、ご当地グルメの祭典「B-1グランプリ」においてゴールドグランプリを受賞した「横手やきそば」など、食における横手ブランドが揃っています。

さらに、観光資源も豊富で、400年以上の歴史を持つ伝統行事「かまくら」をはじめ、明治初期から昭和初期にかけて建築された伝統的な町家や内蔵が多く残り、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された「増田の町並み」や、44万枚以上のマンガ原画を収蔵する「マンガ」をテーマとした全国初の本格的美術館「横手市増田まんが美術館」など、多くの人々が訪れ、賑わっています。



横手のかまくら



増田の町並み（重要伝統的建造物群保存地区）

岩 手 県



一関市は、東北のほぼ中心に位置し、仙台市と盛岡市の間にもあり、古くから交通の要衝として栄え、岩手県南、宮城県北エリアの中核都市として発展してきました。

広い市域の中には、西方に栗駒国立公園栗駒山や名勝・天然記念物厳美溪、東方には県立自然公園室根山や名勝・日本百景狢鼻溪、館ヶ森高原エリアなどの豊かな観光資源に恵まれています。

さらには、一関夏まつり、全国地ビールフェスティバルin一関、一関・平泉バルーンフェスティバル、全国もちフェスティバルin一関、ぼたん・しゃくやく祭り、一関市・大東大原水かけ祭り、せんまやひなまつり、唐梅館絵巻、室根神社特別大祭やかわさき夏まつり花火大会、藤沢野焼祭など数多くのイベントが開催されています。



名勝・日本百景狢鼻溪



一関・平泉バルーンフェスティバル

福 島 県



湯川村は、会津のへそとも言われるように会津盆地の中心に位置しており、国道や主要県道、会津縦貫北道路が通っている交通の要衝です。

国宝3軀を有する勝常寺を代表とする歴史的遺産と、美しい田園環境に恵まれ県内有数の米どころであることから「米と文化の里」と呼ばれており、春には勝常念佛踊り、秋には新米祭などの催しが開催されます。

村では、水稻を中心とした農業が盛んで、村が1枚の田んぼのような美しい景観となりますとともに、年間を通じて田んぼの色が変化することから、四季折々の魅力に触れることができます。

また、年間平均100万人が訪れる「道の駅あいづ湯川・会津坂下」では、会津湯川米を始め、地元で採れた新鮮野菜や、湯川米を使用した純米酒「瑠璃光」などの特産品等もお買い求めすることができます。



湯川村の風景



湯川村新米祭



勝常念佛踊り

山 形 県



鮭川村は山形県の北部、最上圏域北西部に位置し、東西20km、南北12kmにわたる人口4千人弱の小さな農村です。

村の真ん中には村名の由来である「鮭川」が流れ、緑豊かな山々に囲まれた自然の宝庫です。春には多種多様な山菜が採れ、夏は鮎釣りも多く釣りが訪れ、秋は多くの「鮭」が遡上し、各種きのこが収穫されます。村の一大イベント「鮭川きのこ王国まつり」、「まるごとさけがわ鮭まつり」が毎年10月に開催され県内外から多くのお客さんが訪れています。

また、山形県の無形民俗文化財に指定されている「鮭川歌舞伎」は毎年6月に定期公演を開催しており、今年度は50周年記念として、発足当時の舞台を再現した「土舞台公演」を行っております。



まるごとさけがわ鮭まつり



鮭川歌舞伎「土舞台特別公演」

群馬県

みなかみまち

みなかみ町

みなかみ町は、群馬県の最北端に位置し、谷川岳、三国山などで新潟県との県境を画しています。東京から直線距離で約150km。関越自動車道で2時間、JR上越新幹線で1時間20分と首都圏からのアクセスに恵まれています。

谷川岳に象徴されるように山岳が多く、面積の大部分を山林原野が占め、谷川連峰に源を持つ利根川が中央を南下し、月夜野地域で赤谷川を併せ、二つの川の流域に形成されています。また、利根川の源流域として5つのダムが設置され、東京をはじめとする首都圏の経済や生活を維持する大切な水源地域となっています。

地域の標高は、300mから2,000mまでにわたり、山間地としての特殊性がうかがえ、山岳、森林、高原、湖沼、河川、渓谷など変化に富んだスケールの大きい自然は、上信越高原国立公園に指定されているように、国内でも有数の観光資源であり、豊富な温泉やリゾート施設と相まって、年間400万人の観光客が訪れています。また、2017年には、自然と人が共生する取り組みが認められ、ユネスコエコパークに登録されました。



一ノ倉沢



アウトドアスポーツ

東京都

えどがわく

江戸川区

江戸川区は東京都の東端部に位置し、西に荒川、東に江戸川など7つの一級河川と海に囲まれた水辺環境の豊かなまちです。全国の親水公園の先駆けとなった古川をはじめ、区内には総延長27kmの親水公園、親水緑道が流れ、潤いのある快適な都市空間を実現しています。その豊かな水辺を舞台に、第11回サミット(in江戸川)、第16回サミット(in荒川)を開催させていただきました。一方、災害に強い江戸川区を目指し、区民の皆さんと協働でスーパー堤防整備などの治水対策にも積極的に取り組み、安全で安心なまちづくりを進めています。

また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会においてカヌー(スラローム)競技の会場となった江戸川区では、河川などを利用してカヌーの楽しさや水と触れ合う喜びを感じていただくカヌー体験教室を積極的に行ってあります。



江戸川区全景



カヌー体験教室の様子

愛媛県

おおずし

大洲市

大洲市は、愛媛県西南部に位置し、市内中心部を県下最大の一級河川「肱川」が流れる都市です。古くから氾濫を繰り返してきた肱川の暴れ川としての側面に悩まされてきた一方、その豊かな水量と緩やかな流れによる恵みを受け、「水郷大洲」と呼ばれる景観や文化、産業を育ててきました。

夏のうかい、秋のいもたきなど、河川に親しむイベントが多く開催されているほか、冬には白い霧を伴った冷気が川沿いに河口まで吹き抜ける幻想的な自然現象「肱川あらし」が見られます。

また、藩政時代に城下町として栄えた旧市街地では、国の重要文化財に指定された臥龍山荘をはじめとした歴史的な建造物が街並みに残っており、「伊予の小京都」とも呼ばれる情景を生み出しています。古民家等を改修した分散型ホテルや、木造復元された天守に宿泊できる「大洲城キャッスルステイ」の実現など官民連携による歴史的資源を活用した観光まちづくりは、2021年にグッドデザイン賞を受賞しました。



臥龍山荘(不老庵)



大洲城を望む肱川カヌー体験

宮崎県

みやざきし

宮崎市

宮崎市は、宮崎県のほぼ中央に位置し、太平洋に面する東側には約36kmにわたる海岸線が広がっています。黒潮の影響で寒暖の差が比較的小さく、全国的に降水の多い地域でありながら、日照時間が長いのが特徴です。温暖な気候を生かしプロ野球・Jリーグキャンプの受入を通じ、「スポーツランドみやざき」を全国に発信しています。

また、宮崎市を横断し日向灘に注ぐ「大淀川」は九州で4番目に流路が長く、流域面積も九州で2番目の広さがあります。宮崎市が位置する下流部では、河川利用が盛んであり、カヌーや、高水敷での野球、サッカー等のスポーツのほか、花火大会などの各種イベントが開催されるなど、市民の憩いの場となっています。

その他、河口付近には、国内固有種で一部の地域でしか確認されていないアカメが生息しており、河口周辺の砂浜では、アカウミガメの産卵も確認されています。



橋公園と大淀川



堀切岬

愛知県
とよたし
豊田市

豊田市は愛知県のほぼ中央に位置し、愛知県全体の17.8%を占める広大な面積を持つまちです。

全国有数の製造品出荷額を誇る「クルマのまち」として知られ、世界をリードするものづくり中枢都市としての顔を持つ一方、市域のおよそ7割を占める豊かな森林、市域を貫く矢作川、季節の野菜や果物を実らせる田園が広がる、恵み多き緑のまちとしての顔を併せ持っています。

それぞれの地域の持つ特性を生かし、多様なライフスタイルを選択できる満足度の高い都市としてさらなる成長を目指しています。



矢作川とシンボル豊田大橋、豊田スタジアム



ラリー大会 (2021TRG ラリーチャレンジ)

愛知県
あんじょうし
安城市

安城市は、昭和27年5月5日に県下13番目、人口3万7千人の市として誕生しました。

かつては「安城が原」と呼ばれる不毛の地でしたが、先人たちのたゆまぬ努力により完成した明治用水の水にはぐくまれ、「日本デンマーク」と謳われるほどの農業先進都市となりました。

その後は、自動車製造業など世界的なものづくり産業の集積地域に位置する優れた立地を活かし、産業都市へと発展。今日では、都市と田園のバランスが取れた、およそ19万人の市民が暮らす快適なまちとなりました。

今年、市制70周年を迎えた本市は、目指す都市像である「幸せつながる健幸都市 安城」の実現に向け、市民一人ひとりが生活の豊かさとともに幸せを実感できるまちづくりを進めています。



安城産業文化公園デンパーク



安城七夕まつり

愛知県
にしおし
西尾市

大給松平六万石の城下町として古くから栄えてきた西尾市は、愛知県の中央南部に位置し、歴史ある名所旧跡、古式懐しい伝統芸能、大名行列を始めとする祭など文化や芸能が今も大切に受け継がれています。

温暖な気候と矢作川の恩恵の川霧と土壌など大変恵まれた自然を利用して、お茶、植木、花ぎが生産されています。中でも抹茶の原料となる碾茶は、全国有数の生産量を誇ります。また、養殖の鰻やアサリに代表される水産物の生

産拠点としても発展しています。

「城キャッスルステイ」の実現など官民連携による歴史的資源を活用した観光まちづくりは、2021年にグッドデザイン賞を受賞しました。



米津の川まつり



黄金堤の桜

愛知県
へきなんし
碧南市

碧南市は、北は「油ヶ淵」、東は「矢作川」、西・南は「衣浦港」と、周囲を水に囲まれたまちです。昭和32年に衣浦港が重要港湾の指定を受けてからは、臨海工業地域としてめざましい発展を続けています。

窯業、鋳造、醸造などの伝統産業と近代的な輸送用機器関連産業などがバランスよく存在し、さらには、商業、農業、漁業とも調和のとれた産業構造となっています。

碧南市の特色ある施設として、碧南緑地ビーチコートでは、ビーチサッカーやビーチバレーボールで全国規模の大会が毎年開催されています。また、碧南スケートボードパークは、24時間無料で利用することができ、スケートボードやBMXといった若者に人気のスポーツを楽しむことができます。



碧南緑地ビーチコート



碧南スケートボードパーク

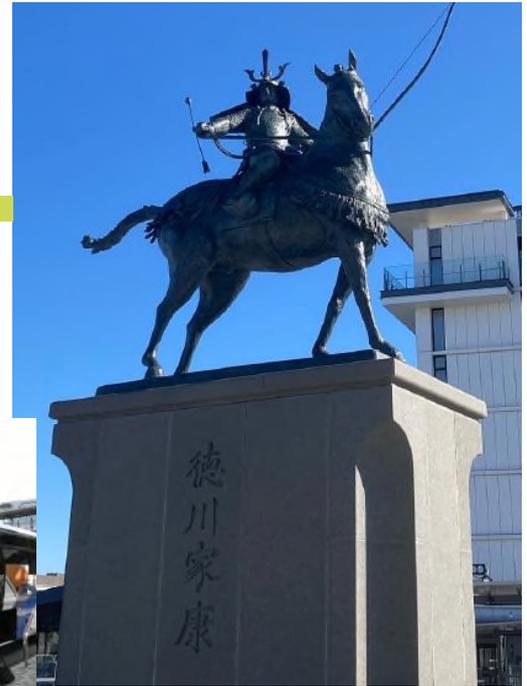
II. 実施内容

現地視察

家康公ひろば～大樹寺～まるや八丁味噌

第30回全国川サミットin岡崎では、総会に先立って、現地視察が行われました。若き徳川家康の銅像が立つ「家康公ひろば」に集合後、松平家、徳川將軍家の菩提寺である「大樹寺」に向かいました。等身大で作られている歴代將軍の位牌や家康の祖先たちの墓所を見て回り、悠久の歴史を感じていただくことができました。また、本堂から三門、総門を通して真ん中に岡崎城を臨む歴史的眺望(ビスタライン)を見ていただき、地元では景観にも配慮していることを学んでいただきました。

その後、岡崎城より西に8丁(約870㍍)の位置にある老舗味噌蔵の1つ「まるや八丁味噌」を見学しました。昔からの伝統製法でつくる八丁味噌の説明を受けながら、岡崎の特産品の魅力を知っていただきました。



家康公ひろば



大樹寺



まるや八丁味噌



令和4年度

全国川サミット 連絡協議会総会 次第

日時：令和4年11月4日(金) 13:30～14:15

場所：桜城橋(橋上広場)



- 1 開会
- 2 会長挨拶
- 3 来賓祝辞
- 4 報告
 - 参加状況について
- 5 議題

1) 報告事項

- ・第1号 第29回全国川サミットin一関 事業報告について
- ・第2号 第29回全国川サミットin一関 収支決算について

2) 協議事項

- ・第1号 第30回全国川サミットin岡崎 事業計画(案)について
- ・第2号 第30回全国川サミットin岡崎 収支予算(案)について
- ・第3号 第30回全国川サミットin岡崎 共同宣言(案)について
- ・第4号 アンケート結果を踏まえた全国川サミット開催の方向性について
- ・第5号 次回開催都市について

6 その他事項

7 閉会



令和4年度

全国川サミット連絡協議会総会 挨拶・祝辞・来賓紹介

開会挨拶 **中根康浩** 岡崎市長

岡崎市の中心部を流れる乙川に架かる人道橋「桜城橋」で全国川サミット連絡協議会総会が開かれました。開催地の中根康浩岡崎市長が全国各地、矢作川流域の自治体から参加した首長らに歓迎の挨拶をしました。橋上広場でテント張っての開催は斬新で、来賓の方々からも好評価でした。開催前には乙川上流部にある宮崎地区で栽培される茶葉を使ったおもてなしもありました。

総会では岩手県一関市で開かれた前回(第29回)の報告と今回のサミットに関連した議案が提出され、全議案が原案通り可決、承認されました。次回開催地は滋賀県守山市に決定しました。



中根康浩 岡崎市長



稲田雅裕
国土交通省 中部地方整備局長



伴康宏
滋賀県守山市環境生活部環境生活課長



塚原浩一
(公財)リバーフロント研究所 代表理事



来賓紹介

国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課長	豊口佳之様
国土交通省 中部地方整備局 河川部長	舟橋弥生様
国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所長	國村一郎様
愛知県 建設局長	道浦 真様
愛知県 建設局治水防災対策監	久保宜之様
愛知県 西三河建設事務所長	寺西億人様
愛知県 豊田加茂建設事務所長	小井手秀人様
愛知県 知立建設事務所長	鈴木雅仁様
愛知県 建設局河川課長	杉谷正樹様

参加自治体紹介



岡崎市のかまちづくりの取組紹介





国土交通省 水管理・国土保全局
河川環境課長 豊口佳之氏

国土交通省 講演

「災害が激甚化し、老朽化が進行する中での魅力ある川づくり」

●激甚化する災害と進行する老朽化について

「激甚化する災害と進行する老朽化」とは、敵の攻撃力が強くなってきているのに、味方の守備力が弱くなっていく状況です。自然災害との闘いは専守防衛なので、守る一方ですが、敵の戦力はどんどん新戦力を加えてくる、あるいは今まで起こってこなかったような災害を起こってきています。その一方で味方の守備力を見ると、ここで新戦力を投入しなければとても勝てない。新しい治水対策を進めなければいけないし、今までの戦士が疲労困憊・故障者続出ではとても勝ち目はない。きちんとメンテナンスをして、英気を養わなければ勝ち目はないということです。

激甚化する災害は、この30年ぐらいで時間50^{ミリ}以上の雨の発生件数は約1.4倍、100^{ミリ}以上の雨は約1.9倍ということでどんどん猛烈になってきているという話です。東北地方の太平洋側から台風が上陸するようなことは今までなかったことです。自然災害が新しい戦力、これまでにない攻撃パターンを仕掛けてきているところ。7月に

豪雨があるというのは今までなかったパターンではなく、よくあるパターンだが大雨が猛烈になってきているということです。

当然ながら、死者・行方不明者といった人的被害もひどい話ですが、浸水では電力や水道などのライフラインの被害を受け、停電あるいは断水になってしまいます。更に鉄道も止まる、高速道路も止まるということ。物流にも影響が及ぶということです。物流が途絶えると、自分の工場が助かって、部品工場がやられては駄目ですし、部品工場と自分の工場を結ぶ道が駄目になっても同様。いろいろな業界が被害を受けます。

利根川の上流にはダム群があります。令和元年台風第19号では、ハツ場ダムの完成がギリギリ間に合ったので、今までの守備陣に新しいプレイヤーが加わり利根川の水位を大いに下げて、ギリギリ氾濫危険水位を超えるようなことはなかった。各地でいろいろな災害がありましたが、利根川は決壊等を免れています。もし利根川が決壊したら首都圏は大災害、日本中が大パニックになっていたところ。7月に

いろいろな地域で被害があり、大災害にならないとなかなか報道されないのですが、災害を免れた所もギリギリ寸前なので、災害じゃなかったから良かったとしていると、大変なことになってしまうということです。現在においても規模がひどくなったと思いますが、今後もこんなひどい状況が続くのかなと思っただら間違いで、これからもっとひどくなります。100年に一度の確率を想定し整備したものが、20、30年ぐらいに一度しかもたない、河川整備計画で20、30年に一度で大丈夫かなと思ったものが、10年に1回の頻度という状況になりかねないです。このため整備を緩めることはできないということで、3か年緊急対策に引き続き、5か年の加速化対策に取り組んでいます。流域治水、道路のミッシングリンクの解消、インフラの老朽化対策、デジタル化なども含めて取り組むことにしていますが、これらは皆さんのご支援を受けて予算を確保しないことにはどうにもならない状況ですので、ぜひともご協力を賜ればと思います。

守備力はどうかということですが、河川管理施設は老朽化しています。今時点で設置から40年が経過した施設は約6割あり、そして、10年後には8割となって、20年後には40年を超過する施設が9割以上になってしまう状況ですので、メンテナンスもしっかりやっていかなくちゃいけないということです。維持管理は事後保全、事前保全の2種類のやり方があります。事前保全には知識、経験豊富な技術職員がいて、その人たちが日々点検していかなくてはならないということで、整備局の人員、技術系の人員の確保が重要になってきます。整備局の体制強化を皆さんからご要望いただいているところですが、ロスなく効率的にやるにはきちんと人員がいなければいけないことですので、整備局の体制強化にもご協力を賜ればありがたいと思っています。

ハイテク技術を使い、建設業の生産性の向上、あるいは働き方改革、安全性の向上、生産年齢人口の増加などさまざまな課題解決に向けて今、DX(デジタルトランスフォーメーション)の取り組みを進めています。今後の洪水を見ると、気候変動によって豪雨が激甚化してきます。そのため、さらなる河川整備をしなければいけません。しかも、治水安全度は、河川整備をやら

ないと横ばいになるのではなく落ちていく。土砂は堆積する、樹木は繁茂する、施設は老朽化するということがあるので、継続的な維持管理が必要ということです。さらなる整備と維持管理の継続。これが不可欠です。

●環境と防災の両立について

環境と防災の両立についてです。激甚化・頻発化する災害に対して、被害を回避・軽減することは当然重要ですが、生物の生息・生育環境の保全などと両立していくことが大事です。災害が激甚化すると、人的被害、社会経済活動への影響だけでなく、大量の災害廃棄物が発生します。これこそが環境問題であり、災害を起こさないということが非常に大事な点です。また、河川整備として、大量の洪水を流すために大きな河川断面が必要となりますが、河床を掘削すると川底の生物に影響を与えるため、河川敷を掘削することで湿地を創出する方法もあります。兵庫県円山川では、コウノトリを野生復帰に向けて保護育成していました。餌場である湿地環境がなくなり野生が絶滅してしまったからです。その中で平成16年の台風23号で緊急的に大規模な治水対策が必要となりました。そこで、洪水敷を掘削して湿地環境

をつくりながら洪水が流れる断面積を大きくしました。激甚災害対策特別緊急事業を行いながら保護していたコウノトリを野生に放つことができるようになり、個体数も増加して京都府や福井県まで繁殖しています。このように、治水対策も大事ですが、防災対策をやるにあたって環境に配慮しながら我々もやっていこうと思っています。

●かわまちづくりについて

河川管理者の責務のある部分を地域の方々が応援し、地域の方々の取り組みを我々が応援する。そういった支援、ネットワーク、連携の取り組みの代表例が、かわまちづくりということです。河川空間とまち空間が融合した良好な空間を目指し、関係者が一緒になって取り組むことで、地域の活性化、地域交流機会の増加、観光客の増加が期待されます。地域の活性化、そして地域ブランドの向上を図ることができればいいなと思います。かわまちづくりの制度でよく頑張った取り組みを表彰するということで「かわまち大賞」という表彰制度もあります。これらの取り組みを河川管理者と地域の方々が一緒になって取り組んでまいりたいと思っています。

首長サミット

今回の川サミットのテーマ「河川空間とまち空間の融合～川の歴史の継承と新たな交流を目指して～」につきまして岡崎市の取り組みを紹介させていただきます。

現在、岡崎市では、中心市街地におけるまちづくり「QURUWA 戦略」を進めており、その戦略の 1 つのプロジェクトに乙川エリアで展開する「乙川かわまちづくり」がございします。なお、QURUWA エリアにおきましては 11 月 1 日に環境省から、脱炭素先行地域に選定されたということもありまして、この点からも取り組みを進めていきたいということでございします。QURUWA 戦略は、豊富な公共空間を活用して、パブリックマインドを持つ民間事業者を引き込む公民連携プロジェクト（QURUWA プロジェクト）を実施することにより、その回遊を実現させ、波及効果として、まちの活性化（暮らしの質の向上、エリアの価値向上）を図る戦略で、これを達成する手段として、7 つのプロジェクトを位置づけております。このうち、乙川エリアでは民間主体の公民連携によるかわまちづくりを進めてまいりました。公民連携による、かわまちづくりの行政支援としまして、平成 21 年度に国土交通省により創設された「かわまちづくり支援制度」を活用し平成 27 年 3 月 30 日にかわまちづくり計画に登録、平成 27 年 11 月 26 日に河川敷地占用許可準則に基づく、都市・地域再生等利用区域の指定を愛知県から受けております。これにより、河川敷地の利用に対して一定の条件は付きますが、民間による営利活動が伴う利用が可能となる環境を整えてまいりました。

行政手続き上、河川敷地の民間利用

の環境が整いましたが、いざ、使ってくださいと言われても、どのように使っていくのか、最初は分からないことが多かったのですが、まずは、社会実験で水辺空間活用の可能性を模索する「おとがワ!ンダーランド」を平成 28 年度～令和元年まで実施しました。その結果、河川空間を活用する多くの民間プレイヤーとファンを生み出してしております。現在、民間主体により実施されている、かわまちづくりの主要プログラムの紹介です。まずは乙川ナイトマーケットです。毎年 6 月～ 11 月の第 2、第 4 土曜日の 16 時から 21 時までに行われている夜市です。最近では、100 店舗を超える出店があり、夜の岡崎の風物詩となってきています。本日も 21 時まで開催されますので、歓迎交流会後にぜひお楽しみいただければと思います。続いて、あいち橋の会に所属する県職員の方が実施している桜城橋の「橋ふき」です。乙川の上流部額田のヒノキ材でできた木の床の面を、愛情込めてこまめにメンテナンスすれば、より長く使うことができるという思いを持って実施されています。今では、多くの子供たちも自主的に参加し、遊びの一部ともなっています。橋ふきのあと、橋上教室も行われております。続いては、スノーピークビジネスソリューションズによる、ローカルワークツアーズです。民間企業研修として自然指向のワークスタイルを五感で体感することを取り入れてもらうことで、自社変革の軸を作るためのプログラムです。持続可能なワーケーションモデルの構築を目指しています。続いてこちらは、「川暮らし」の風景です。このプログラムは、乙川上流部の額田地区と連携して、自然や乙川流域の魅力を感じて体験プログラムと



岡崎市 市長 中根康浩

なっております。その他、広大な河川敷地と交通利便性のポテンシャルを活かして、あいちめし、アウトバックガレージマーケット、犬市場などの大規模なマルシェのほか、花火大会やラリージャパン、SUP スプリント選手権などさまざまなプログラムが行われております。

かわまちづくりと連携した取り組みとして、乙川沿いで大きな民間投資が動こうとしています。1 つは、乙川リバーフロント交流拠点における、コンベンション・ホテル整備です。昨年度、市民意見を取り入れたのがこの絵になります。365 日子供から大人まで多様な世代が訪れる河川空間と一体となった交流できる場所を公民連携により創出します。

2 つ目は、今年 3 月に名古屋鉄道株式会社が発表いたしました東岡崎駅の北口及び南口周辺の一体的な再開発計画です。QURUWA 戦略と連携して進められます。

最後に、令和 5 年 1 月放送開始予定の大河ドラマ「どうする家康」を紹介させていただきます。この大河ドラマは、「新たな視点で、誰もが知る歴史上の有名人・徳川家康公の生涯を描く」ということで、岡崎で生まれた家康公を多くの方々に知っていただくとともに、この岡崎の QURUWA のまちをより多くの方に訪れていただく絶好の機会だと考えています。大河ドラマ館など準備を進めておりますので、ぜひ改めて岡崎にお越しいただくと幸いです。

首長サミット



秋田県横手市 高橋 大 市長

第30回川サミット、このようなユニークな場で、川の魅力を利用した取り組みを勉強させていただき、ありがとうございます。

横手市は秋田県内陸南部に位置する広大な横手盆地の中央に存在する城下町です。令和3年と令和4年は積雪深が約2mに達し、都市空間を持つ地域にとっては相当な積雪がある地域です。横手市には一級河川で全国13位の流域面積を有する雄物川があり、皆瀬川、成瀬川、横手川など支流も巻き込みながら流域を形成しています。市内1万4000町歩の田畑を潤す流域ですが、豪雪は雪解けしますと、広大な田んぼを潤す大変貴重な水源となっています。

横手市には小正月行事である横手の雪まつり「かまくら」がございますが、河川敷において小さい「かまくら」を数千個作り、そこにろうそくで明かりを灯し、さらに魅力を引き立てるような催しもしております。また、最近では水生生物に着目した観光にも取り組みたいと考えております。

最初申し上げました通り、大変な雪国ですので、川から取水してまちの側溝に流して、市内に降り積もった雪をその側溝に流して戻すという形で、除排雪の一助としても河川を有効に活用させていただいております。河川力なくしては厳しい冬も越せないという状況です。

横手市の魅力は冬の魅力もあります

が、豊富な食の宝庫でもあります。B-1グランプリでゴールドグランプリを受賞した横手やきそばのほか、酒の産地でもあります。山内杜氏という杜氏の集団が存在して、全国の造り酒屋に出稼ぎで赴き、それぞれの地域の酒の味を引き立てるといった集団です。彼らが横手の酒も造っております。ぜひとも食、酒の文化も横手にいらして堪能いただければと存じます。



岩手県一関市 石川 隆明 副市長

前回開催となりました一昨年の開催「第29回大会」におきましては、当市に、過去最多タイの自治体様のご参加いただいたことを、この場をお借りしまして御礼申し上げます。ありがとうございます。

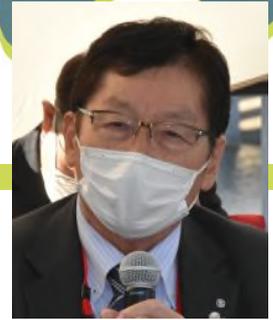
一関市は、東北地方のほぼ中心に位置し、盛岡市、仙台市の間地点でも

あり、東北地方の中核都市を目指して頑張っています。一方、一関市は地形的な特徴から古来より水害常襲地となっています。昭和22、23年のカスリン、アイオン両台風では2年連続で大きな被害を受け、合わせて600名を超える死者・行方不明者を数えました。そのような中、当時の建設省において、一関遊水地計画に取り組んでいただき、昭和47年に事業スタートしました。本年9月に事業50周年を迎え、記念式典などを行ったところですが、50年たった事業は未完了です。完了は2020年代前半とされており、もう少しでゴールというところですが、一関遊水地事業は1450haの遊水地の面積、そして2700億円とも言われる事業費を投じて間もなく事業完了ということで、住民は安心な生活

ができるものと期待しています。

そのような北上川の遊水地事業に並行して、支流となる市街地を流れる磐井川のかまちづくり事業に着手しました。現在、国土交通省は築堤工事（修繕工事）に取り組んでいます。ハード計画はありますが、ソフト事業をどのように展開していこうかと、一関市は様々な社会実験を繰り返しています。

本日は皆様方の取り組み事例などを参考にしながら、国土交通省とも相談し、ハードは間違いなく進んでいこうと思っておりますが、市民に認められ、親しまれる川になるような取り組みを今後進めたいと考えておりますので、皆様方の発表を参考にさせていただきます。



福島県湯川村 **三澤豊隆** 村長

湯川村は会津盆地の真ん中で米どころです。実は殿様とつながりがあります。一級河川の阿賀川と日橋川に囲まれています、阿賀川の方が只見川と合わさって、阿賀野川となって新潟に流れます。歴史上、上杉景勝が会津城を任せられます。その時に河川の近くに城を建てたんです。神指城と言います。今の鶴ヶ城の倍ぐらいの面積でした。それは何かというと、越後から会津への舟の流れ、物の流れ、物流を図ろうとした思いだったのですが、残念ながら天下が取れずに徳川様の天下になりまして、1年で築城

をやめました。阿賀野川の流れの中には物流があり、鮭も上がってましたが、今はダムができてありません。

今は隣の会津坂下町と2つの自治体で越後街道と川の街道の交わる所に道の駅を作りました。川の駅、人の駅、道の駅。この3駅を重ねまして、道の駅はコロナ過においても年間100万人ぐらい地元の方にも愛されるほどのにぎわいをつくりました。川の駅は、これから2次工事がスタートするところで、そこでは、河川敷の中で子供たちのイベントや自治体主催の1200人ほどが集まる新米祭

などが行われておりまして、会津盆地の真ん中で拠点となるような場所として、河川敷の中に少しずつ造られてきております。これをなお一層高めていきたいと考えております。

岡崎市のような素晴らしい河川敷の利活用を、先ほど歩かせていただきましたら、なお一層頑張らなきゃいけないと思いました。



山形県鮭川村 **元木洋介** 村長

今日の川サミット、素晴らしいシチュエーションの中でのサミットで感動いたしました。

鮭川村は山形県の北部(県北)に位置する人口4000人の小さな村でございますが、きのこ、山菜、花、米が特産品で、特にきのこの生産が盛んで、通年栽培しています。

観光としては、開湯100年を迎えた「羽根沢温泉」やコテージ、オートキャンプ場を備える「鮭川村エコパーク」がございます。また、庄内地方の酒田市と隣接する「与蔵峠」からまぼろしの滝群までのトレッキング、「千年桂」をはじめとする大桂、小杉の

大杉、米湿原等の大自然に囲まれた観光スポットも多数ございます。

村名の由来である「鮭川」は鮭が上る川です。縄文の時代から鮭漁が行われ、貴重な食料として鮭が食されてきました。

現在は、増殖のため漁業協同組合による鮭の採捕・ふ化・放流事業が行われております。「鮭川」は、最上川の支流では一番大きな一級河川でございますが、流域でふ化・放流できるのは鮭川村だけです。11月からウライ漁で採捕してふ化した稚魚は春に放流します。

この事業を通じて、村の小学校の児童と東京・荒川区の児童が交流しており、県と漁協の協力をいただいて、受精卵を荒川区の小学校に持って行って、ふ化するまで育てていただき、放流時期になると荒川区の子どもたちが鮭川村に来て、鮭川村の子どもたちと一緒に放流します。

「鮭川」は東北地方の一級河川の中でも水質ベスト10に入る川でして、生まれた鮭川へ4年後に鮭が帰れるように、学校では環境保全のための授業も取り入れていると

ころです。

イベントとしては、10月末から11月23日まで鮭の釣獲調査事業を土曜、日曜を中心に実施しており、1日に限られた人数しか入川できませんが、関東方面から毎年来られる釣り人もおり、期間中、延べ600人ほど参加されます。これについては、参加者による経済効果もあるなと思っています。また、鮭を利用したイベント「まるごとさけがわ鮭まつり」も開催しており、コロナ禍で2年間は中止していましたが、今年3年目で復活させました。通常は来場者が5000人ぐらいのイベントでしたが、コロナ対策をやりながら1500人ぐらいの来場がありました。来年は元通りにしたいなと思っています。

こうした川に関わる取り組みにより人的交流、物的交流が促進され、村も活性化してまいります。

最後になりますが、鮭川村では鮭以外にも、春はサクラマス、夏は鮎を狙いに多くの釣り人が訪れます。川は村の資源として、これからも大事にしていきたいというふうに思っています。

首長サミット

みなかみ町は関東最北部に位置しまして、新潟県の県境、首都圏3000万人の水がめであります利根川の源流の町であります。町内には5つのダムがあります。今後はダムを活用した、例えば家族で楽しめる釣り大会など関係機関と協力する中で、そういったイベントを企画したいということで現在調整を進めています。

また、自然環境と人間が共生することがユネスコに評価されて、「みなかみユネスコエコパーク」が平成29年に登録されました。現在、かわまちづくり事業につき

ましては、利根川に面している道の駅「みなかみ水紀行館」の利根川沿いの整備を進めており、そこヘドッキ付きのカフェの建設を予定しています。これから、ますます川を利用した事業にしっかり取り組む中で、みなかみ温泉郷と水紀行館、かわまちづくり事業を活用した水の利根川を融合した取組をしっかりと行うことで観光客の誘致、点と点を結ぶ事業を展開していければと考えております。

結びに、山あり谷あり、谷川岳も大変勇壮な山であります。温泉も18湯ございま



群馬県みなかみ町 阿部賢一 町長

す。東京から新幹線で1時間6分という交通面も大変恵まれたみなかみ町でございますので、ぜひ一度皆様方に訪れていただきたいと思います。来ていただいた折には心からご歓迎申し上げますので、よろしくお願い申し上げます。



東京都江戸川区 天沼 浩 環境部長

私からは3点ほど、まずは江戸川区と徳川公の関係を含めて、江戸川の話をしていただき、次に荒川の話、最後に川の歴史継承と新たな交流を目指すということで新川の話をも簡潔にさせていただきますと思います。

皆様、ご承知の通り、徳川公が1590年に入府されてから30年後に利根川の東遷がありました。江戸川は、それまでは洪水に見舞われておりましたが、赤堀川、常陸川を通じて銚子の河口の方に

東遷させる工事が1621年に始まり、今の形になったのが1928年ということで、300年掛かっています。江戸川の水量が安定的に治まるようになったのが徳川の時代と同じぐらいかかっているということです。国家100年の計ではないですが、治水は非常に時間がかかる大変なものだと思います。その中で、先ほど、豊口課長様からお話がありましたが、台風19号(2019年)がありまして、この時に初めて江戸川で避難指示を出しました。荒川も危険水位いっぱいになりまして、八ッ場ダムがあったおかげで助かったということは本当に間違いないことだと思います。

こちらに群馬県みなかみ町様がお見えになられますが、上流の皆様にも感謝しつつ暮らしている状況です。いずれにしても江戸川区は洗面器のような形で、そのほとんどの7割が海拔ゼロメートル地帯ですので、現在、江戸川の流域に国

土交通省、東京都、江戸川区で3つの大型プロジェクトを1つにまとめた仕事をしております。それは、スーパー堤防、都市公園の高台化、区画整理の3つをまとめて同時に実施するという大規模プロジェクト「高台まちづくり」を進めています。令和14年度まで続く予定の事業です。これからなお10年かけてしっかりやっていきたいと思っております。高台で区民の命を救うということについては、我々が今やっております河川空間とまち空間の融合という点でいろいろと意見も頂いているところではありますが、土木部、都市開発部、環境部が力を合わせて頑張っているところです。

荒川ですが、先ほど生態系のお話が出ましたけれども、現在川の浚渫をしております。荒川の水位が若干下がっているところが湿地帯になっておまして、水生生物が戻ってきている部分があります。荒川には、荒川ロックゲートという



閘門もありまして、荒川下流河川事務所というところと話をしているところなんです。例えば、閘門を使ってカヌーで川辺で遊べないかとか、小松川千本桜の川の内側にカフェが作れたらいいな、河川敷をうまく活用できないかとかというような話もあります。

最後に、徳川の話に戻りますが、新川という川がありまして、「塩の道」と言われています。家康公が行徳の塩を

江戸城の方に運ぶのに運河を掘削したというようなことでして、こちらの方も我々の方としてはにぎわいづくりに役に立っております。リバーフロント研究所の土屋様がかつて新川にたくさん橋を架けられたり、江戸情緒あふれるまちをつくられてまして後で本人に詳しく聞いてもらえればと思いますが、そのようなことでそこには新川千本桜というのがありますが、千本桜については地元の皆様の浄

財で千本植えたということから、新しいまちづくりとして当時非常にニュースになりました。そんなことをしながら、東京の中にありながら最下流でありますので、人々の命を守るということ、本区の特徴でもあり最も魅力のある水と緑のまちづくりということで今進めているところでございます。



愛媛県大洲市 谷川 剛 建設部長

愛媛県大洲市は、松山より南西に約50㎞に位置する約4万人のまちです。県下最大の一級河川である肱川とともに発展してきた歴史と文化の薫る田園都市です。肱川は川の延長が103㎞ありますが、河口までの直線距離はわずか18㎞と短く、河床勾配が非常に緩やかです。さらに中心市街地である大洲盆地の地形が手のひらのような形となっており、洪水が集中しやすく、また吐けにくい特性となっていることから、過去に幾度となく水害に見舞われてきました。特に未曾有の大災

害となった平成30年7月豪雨では、自然の驚異を改めて思い知らされたところで

一方で、平時の肱川は清流と呼ばれ、夏には日本三大鵜飼いとして知られる「大洲の鵜飼い」、秋には河原で里芋の鍋を囲む「いもたき」、また、カヌー・SUP体験など、身近に水や自然と触れ合うことのできる憩いの場として市民生活に溶け込んでいます。

また、かつて大洲市は、肱川を使って木材の積み出しを行っており、河口の長浜は、木材の日本三大積出港と呼ばれていまして、江戸期から大正期にかけては、上流各地から河口までを結ぶ交通路として、川舟や筏が往来し、流域の人々の生活を支えてきたところなんです。「肱川かわまちづくり計画」では、当地域に繁栄をもたらした『かわみなと』を復活させ、魅力あるまちの拠点の創出を目指し進めております。

また一方で、大洲市の観光面に目を向けますと、大洲城に1泊100万円で城主体験のできる「キャッスルステイ」や、古民家を改修した分散型ホテル「NIPPONIA HOTEL大洲 城下町」など、歴史的資源を活用した観光まちづくりを進めており、この取り組みが評価され、2021年度グッドデザイン賞を受賞し、さらに、本年9月には2022年の「世界の持続可能な観光地100選」にも選ばれました。

今後も、肱川沿いに佇む「大洲城」や「臥龍山荘」などの観光資源や、古民家などの地域資源といった、肱川の魅力を最大限に活用しました、緑豊かな肱川の風景と育まれた文化、流域で息づく営みを未来へ繋げるためのまちづくりを進めてまいりたいと考えております。

首長サミット



愛知県豊田市 高井嘉親 副市長

豊田市は本サミットの開催市である岡崎市のちょうど北隣に位置しており、愛知県のほぼ中央部、県下でも最大の面積を誇る自治体です。「クルマのまち」として工業が盛んで人口が集中する市街地から、矢作川の源流となる長野県のまちに接する約 900 平方キロを擁しています。

豊田市の中心部、市街地を矢作川が南北に縦貫しております。かつてから、交易・産業・交通の大動脈であり、脈々と現在に至るまで受け継がれてきております。我々はその恵みを今享受しているところです。

こうした生活基盤の場としてだけでなく、矢作川は余暇フィールドとして自然観察の場、さらには休日等にはさまざまなイベントが開催される場として多くの市民に親しまれております。また、天然アユが遡上し、都心近くでアユが釣れる豊かな自然あふれる清流のまちであります。その清流を維持す

るために、地域住民が主体となっている河川愛護団体や NPO 法人、企業ボランティアの皆様によって、さまざまな清流維持活動がなされております。

また、豊田市としても市直属の組織である「矢作川研究所」が平成6年から活動しており、河川環境の研究活動を通じて河川利用の適切な呼びかけなどをしてきているところであります。

また、治水に目をやりますと、令和2年度、国土交通省により長年の課題であります鵜の首と呼ばれる狭窄部の対策事業に着手していただきました。さらに、抜本的な対策である矢作ダムの再開発事業も進めていただいております。本市としては、今後も市民が安全安心で暮らせる「水害に強いまちづくり」を果たしていくところでございます。

利活用という点につきましては、都心近くのにぎわいのまちづくりが進む中で、「まちと水辺が一体となった魅力ある空間づくり」をコンセプトにして「矢作川かわまちづくり」事業を展開しております。平成 30 年3月に策定してから、国土交通省と連携し基盤整備を展開しています。令和元年には矢作川

沿いの豊田スタジアムがラグビーW杯の会場となり、河川敷では民間が主体となったさまざまなイベントが開催されるなど、一体となった取り組みを進めているところでございます。

とりわけ最近では豊田市では、ラリー競技会の開催。先ほど、冒頭でも中根市長さんのあいさつにありましたが、ラリー競技の開催を「山間振興」、「交通安全の推進」、「自動車産業の振興」ということで非常に公益性の高い事業として位置付けておりまして、ラリーを生かしてまちづくりを進めております。2カ年開催を見送られたWRC世界ラリー選手権は、11月10日から開催されることになっております。また、来年からは豊田市が主催者として誘致を進めております。その拠点となる豊田スタジアムをはじめとする矢作河川敷においても、ラリーのコースとなるように河川管理者である国土交通省豊橋河川事務所のご協力を得ながら今調整しているところであり、我々としてはラリーを軸としたまちづくりに今後力を入れて矢作川の魅力創出に努めていきたいと思っております。



愛知県安城市 神谷 学 市長

安城市は岡崎市の西隣に位置しております。矢作川のちょうど向かい側がほしい安城市となります。昭和27年に市制を施行しておりまして、今年には市制70周年。県下13番目の市として誕生いたしました。かつては「安城が原」と呼ばれる不毛の地でしたが、矢作川を水源とする「明治用水」という農業用水の豊かな水に育まれて、大正末期から昭和初期には「日本デンマーク」と呼ばれる農業先進地となっております。その後は世界的なものづくり産業、特に自動車関連産業でありますけれども、集積地域に隣接する優れた立地を生かしまして、産業都市へと発展し、今では約19万人の市民が暮らすまちとなっております。

本サミットのテーマであります「川とまちとの融合」といたしまして、私からは「明治用水」と「安城」のまちの関わりについてご紹介申し上げます。

今から200年以上前の19世紀初頭

になりますけれど、安城の水不足に苦労する農民を救うために、「都築弥厚」という地元の豪農により、矢作川から水を引こうとする計画が立案されました。この計画は江戸時代末期に一部許可されましたが、弥厚が亡くなってしまったことにより、頓挫してしまいます。それでも都築弥厚の夢は途絶えることなく、その遺志を受け継いだ方々によって計画が再開されることとなりまして、明治13年に「明治用水」と呼ばれる農業用水が完成いたしました。最初の計画から数えますと70年後ということになります。

時代が移り変わっていく中、明治用水によって引かれた水は農業だけではなく、今日では工業や上水道としても利用されるようになっております。ところが、今年の5月17日、全国的にも大きなニュースとなりましたが、明治用水の頭首工という取水口の機能を果たすところで大規模な漏水が発生してしまいました。漏水による断水の影響は、安城

市ほか7市にまたがる農業用水だけにとどまらず、工業用水にまで及ぶことになってまいりまして、この地域の基幹産業である自動車の生産にも大きな影響が出てまいりました。今回の事態に直面いたしまして、改めて明治用水がこの地域の重要な産業基盤であるということとともに、不毛の地を開拓する計画をされた先人たちの功績の大きさを再認識することとなりました。

矢作川流域では「流域は1つ、運命共同体」という共通認識のもと、民・学・官それぞれが連携し合い、数々の課題に取り組んでまいりました。今後も、本サミットを主催していただきました岡崎市をはじめ、本日出席されてます流域各市の皆さんとともに流域自治体の一員として川まちづくりに取り組んでまいりたいと思います。

首長サミット



愛知県西尾市 **中村 健** 市長

西尾市は岡崎市の南西に位置し、安城市や碧南市の市境となる北西部を矢作川が流れており、また幡豆郡3町との合併によって南部は三河湾に面し、東部には三ヶ根山の山々が連なるなど豊かな自然に恵まれたまちであります。市域を2分割する形で流れております矢作古川は、かつては矢作川の本流であり、古くは自然の流れのままに幾筋にも分かれ、大雨が降るたびに氾濫を起こし、大きな被害が出ておりましたが、江戸時代に徳川家康の命によって新川を開削したことで流れが変わり、現在の矢作川が概ね形成されたと言われております。

この矢作川では毎年お盆の8月15日になりますが水難者や戦没者の霊を慰めるための伝統的な行事として「西尾・米津の川まつり」が開催されております。読経が流れる中、約1500個の揺れ

る万灯が川面に浮かび、上空にはスターマインや仕掛け花火が輝くなど幻想的な光の世界が作り出され、多くの方々にお越しいただいているイベントとなっております。また、西尾市はこの矢作川の恩恵を受けて農業や水産業が盛んでありまして、特産物であります抹茶、カーネーション、ウナギ、アサリなどの生産量・漁獲量は全国トップクラスでありまして、その中でも西尾の抹茶や一色産ウナギは特許庁の地域ブランドとしても認定されておまして、ふるさと納税の返礼品としても大変好評となっております。河川敷においては公園として利用されており、矢作川ではテニスコート、サッカー場などのスポーツ施設が整備され、矢作古川ではスポーツ施設のほか、八ツ面山公園や国道沿いの道の駅とも交流できる高水敷を利用した「遊ぼっ茶広場」としてバーベキュー場や散策路などを整備することにより、川は親しみのある憩いの場として多く

の市民でにぎわっております。

その他にも中心市街地を流れますこの沢川におきましては現在、水辺プラザ事業を展開しており、小学校に近いため、身近な遊びの場、教育の場となるよう自然な状態をできるだけ残しながら堤防の勾配を緩やかにして水辺に近づける川岸の整備ですとか、自然環境の保全回復、遊歩道の整備等を行うことにより、周辺の西尾城社の二之丸広場、丑寅櫓の復元整備とともに西尾城の史跡の魅力を高めているところであります。

今後においても河川空間の利用などにより、地域の歴史を生かしながら、緑豊かな風景と育まれた文化、流域で息づく営みを未来へとつなげるため、西尾市の魅力を最大限に活用したまちづくりを目指してまいりたいと考えております。お近くにお越しの際にはぜひお立ち寄りいただければと思います。



愛知県碧南市 榑宜田政信 市長

碧南市は矢作川の右岸河口域に位置しております。東は矢作川、北は油ヶ淵という愛知県唯一の天然湖沼、西・南は衣浦港ということで周囲を水に囲まれており地形的には標高約 10 ㍎程度の矢作川沖積地からなる平坦地でございます。南端部には愛知県で消費される電力の約半分を供給しております JERA・碧南火力発電所やトヨタ自動車の工場が立地をしております。

せっかくの機会ですので「矢作新川の開削」について少し話したいと思っております。江戸時代、1605 年に徳川家康の命を受けまして、現西尾市矢作古川の分流点より西尾市米津町油ヶ淵流入地までの台地を開削いたしまして、現矢作川本流の川筋が築造されております。これは矢作川治水を目的に、流水の一部を排水することを計画されたもので洪水対策ということが推測されております。開削後、激しい水流が両岸の土を崩したことから、川幅は見る見るうちに広がったと言われておりまし

て、本流となった矢作川は、上流で浸食した土砂を絶えることなく下流域へ押し流し、こうして堆積した土砂によって新田が開発されることになりました。

これにより、現在、矢作川河口一帯は砂質土壌で、県下有数のニンジン、タマネギ、サツマイモ、サトイモ、トウモロコシ、落花生等の露地野菜の産地となっており、とりわけ、碧南市においては特産のニンジン「へきなん美人」という名前を付けておりますが、その一大産地となっております。甘みとコクがあり、ニンジン独特の臭みがほとんどなく、子どもやニンジンが苦手な方からも好評を頂いております。2019 年の大嘗祭にも献上されました。全国的なブランドに成長しております。これから 12 月、1 月が旬でございますので、一度ご賞味いただくと、普通のニンジンと全く違うということが分かります。

さて、2023 年に放送されます NHK 大河ドラマ「どうする家康」でござ

いますが、今回の川サミット開催地でございます岡崎は、家康が生まれ育った地として大変有名であります。実は碧南市にも、徳川家康公の幼名「竹千代」という名前を付けたお寺「称名寺」をはじめ、三英傑ゆかりの地がございます。大河ドラマ放送をきっかけに碧南市と徳川家康のつながりをたくさんの方に知ってもらうため、「三英傑 足あとのある 碧南市」というプロジェクトを行っており、市民や地元商店街と一緒に盛り上げているところであります。

今後とも国や県、矢作川流域の自治体とも連携を図りながら、これまで培った歴史を継承するとともに、時代のニーズに沿った取り組みをしていきたいと考えておりますので、何卒よろしくお願いを申し上げます。



首長サミット（講評）

国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課長 豊口佳之氏

いろいろ聞かせていただきましたところ、下流の市街地の取組や上流の山間部の取組もあれば、ダムをやっているところ、遊水地をやっているところ、南の地域もあれば、雪の地域もあるということで非常にバラエティーに富んでいますし、近年災害を受けてご苦労されている地域もあるということで地域特性が皆さん違う中で、かわまちづくりなどの取組を進められております。ですから、どうしても同じような取り組みをみんなで真似して、全国金

太郎飴みたいになったら面白くないと思うこともあるんですが、そもそも地域特性が違いますので、一生懸命真似ても全く同じものには絶対ならないので、安心してどんどん真似して、良い情報は共有していただければいいと思います。

川はそもそも自然公物なので、すごく小さい川も少し大きい川もあって全部千差万別です。これに加えて地域自体も気候が違えば置かれている状況も全然違うので、このような意味ではまだ検討中、着手したばかりの自治体もあれば、工事中、完成した、あるいは完成したけれども2期工事に着手している自治体

もあると、いろんな段階の違いもあるので、まさにやれることはやっていく、真似してやって、それぞれ高め合っていければ良いのではと考えます。

皆さんの話を聞いていると、家康公と河川のつながりというのが、矢作川でも川を付け替え、利根川でも付け替え、付け替えるのが大好きだったのかな。とにかく家康と河川のつながりが深いということで、来年は家康の年になるのにあやかって、来年は河川の年となればいいなというふうに思っております。一緒にこの地域とともに盛り上がっていただければいいなと思っております。



歓迎交流会

乙川沿いの岡崎ニューグランドホテル「飛竜の間」で歓迎交流会が開かれました。主催者である中根康浩 岡崎市長が挨拶し、中根武彦 岡崎市議会副議長より乾杯のご発声を頂戴しました。

会場内では、グレート家康公「葵」武将隊による演武が披露されたほか、矢作川流域自治体5市の銘酒や岡崎市特産の八丁味噌を使った料理が振る舞われました。



中根康浩 岡崎市長



中根武彦 岡崎市議会副議長



伴 康宏
滋賀県守山市環境生活部環境生活課長



全国川サミット in 岡崎 開会式

日時：令和4年11月5日（土曜日）

会場：図書館交流プラザ（りぶら）

◆オープニングセレモニー「Jazzスペシャルステージ」

◆開会挨拶 中根 康浩 岡崎市長

◆来賓挨拶 愛知県知事 大村 秀章様

国土交通省中部地方整備局副局長 安邊 英明様

ジャズシンガー今岡友美さんと
ジャズピアニスト菅沼直さんによる
Jazzスペシャルステージ



第30回全国川サミットin岡崎の2日目は、岡崎出身・在住のジャズシンガーの今岡友美さんとジャズピアニストの菅沼直さんの2人によるスペシャルステージで開幕しました。

岡崎市は、「ドクター・ジャズ」として知られるジャズ愛好家の故内田修氏の出身地で、内田氏が多くのジャズミュージシャンと交遊があったことや、収集していた多数のCDやレコードといったコレクションを市に寄贈したことなどが契機となり「ジャズの街岡崎」として、ジャズ振興に関する取り組みが活発に行われております。

今回登場していただく今岡さんは、故内田氏に見いだされたシンガー

です。小柄な体から発せられる天性の歌声と確かな歌唱力が自慢で、地元岡崎を中心に幅広く活動してきた実績から、今年7月に「Jazzの街岡崎アンバサダー」に就任しました。菅沼さんは大学在学中からプロピアニストとして活動され、ボーカル、ピアノ双方をこなす弾き語りもできるプレイヤーです。

会場は、今岡さんのパワフルな歌声と菅沼さんの華麗な演奏が響き渡り、多くの出席者は聴き入っていました。

オープニングセレモニー後は、中

根康浩岡崎市長から会場にお越しいただいた皆様へ歓迎のご挨拶を申し上げ、来賓の大村秀章愛知県知事、安邊英明国土交通省中部地方整備局副局長よりご祝辞を頂戴しました。



中根康浩 岡崎市長



大村秀章 愛知県知事



安邊英明 国土交通省
中部地方整備局副局長



愛知県建設局河川課長
杉谷正樹氏

第1部 シンポジウム 事例発表①

矢作川カーボンニュートラルプロジェクト

本日は「矢作川CN(カーボンニュートラル)プロジェクト」を紹介させていただきます。

取組に至った経緯は、国においてCO2削減目標が引き上げになったことを契機に、愛知県が2021年6月に「愛知カーボンニュートラル戦略会議」を立ち上げ、事業企画アイデアを一般の皆様から募集したことから始まり、同年9月から矢作川カーボンニュートラルプロジェクトに着手、今年の3月にプロジェクトの全体像をとりまとめて公表したところでございます。

一口に言うと「水循環」をキーワードとして、森林保全や治水、利水、下水処理などにおいてカーボンニュートラルの実現に向けて、最新の技術を活用して総合的かつ分野横断的にあらゆる施策を推進するものです。

具体的に、再生可能エネルギーの

創出では、水力発電力の増強、小水力発電施設の設置、太陽光発電施設の設置、バイオマスの発電の推進といったものが考えられます。また、エネルギーをつくるだけでなく、いかに省力化していくかという観点もあり、下水や水道施設の再編、機器の更新など、さらにCO2を吸収する森林の維持拡大も考えられます。

さらに分野を横断した流域マネジメントなど総合的な取り組みも考えられます。これらを合わせ28項目の施策を取りまとめたものを矢作川CNプロジェクトとしております。

今後は、矢作川CN推進協議会とその下にある「再生可能エネルギー」「省エネルギー」「CO2吸収量の維持・拡大」「新技術・新システム」の4つの分科会を設立して進めていきます。各分科会においては、愛知県担当部局による関係者との意見交換や、外部アドバイザーの意見を聞きながら施策を深め広げる役割を持たせています。

各分科会が当面優先して取り組む課題として、再生可能エネルギーの分野では、ダム運用の高度化や公共用地を活用した太陽光発電の設置、省エネルギーの分野では、上水道、下水道の再編・統廃合、CO2の吸収量維持・拡大の分野では、森林や公園等における吸収源の整備・保全、木材利用の推進による二酸化炭素の固定、新技術・新システムの分野では、水循環マネジメントや上下水道施設の点検など個別分野の枠組みを超えて各施策に横串を刺す役割を持たせた検討を行い新たな事業の概念を創造していきます。

最後、横断的な施策が求められる水循環マネジメントや上下水道の連携、新材料の活用に関する方面では、行政側に知見が少なく立案が困難な分野でありますので、こういったものにつきましては民間の提案を受けて必要な対応ができる体制構築を検討していきたいと考えています。



第1部 シンポジウム 事例発表②

「川の関係人口」を耕す乙川のかわまちづくり



岡崎まち育てセンター・りた
天野 裕氏

普段私は「岡崎まち育てセンター・りた」というまちづくりのNPOに属しており、これまで、岡崎のかわまちづくりに当初から関わってきたという立場から、『「川の関係人口」を耕す乙川のかわまちづくり』と題して発表させていただきます。

乙川は一級河川・矢作川最大の支川です。2006年に旧額田町と合併したことで水源の森から矢作川合流地点まで、乙川流域のほぼ全てが岡崎市域になりました。また、市域の6割が森林を占め、まち中から2、30分も車で走ると自然豊かな森にたどり着くという距離感なので、比較的まちと森が近いと言えます。乙川のおかげで岡崎市は自己水の比率が高く、岡崎の水道の50%は乙川の水で、私たち市民は乙川の水で生活しております。

岡崎市の中心市街地は、岡崎城下町と旧東海道の宿場町の歴史を持つ「康生」地区です。1970年代

には西三河最大の商業地として栄えましたが90年代後半から郊外に商業の中心が移り、この40年ほどで空洞化の一途をたどりました。そうした中でなぜ「かわまちづくり」だったかということ、長らくこの岡崎は主要駅の名鉄東岡崎駅と康生が乙川と国道1号によって分断されていることが指摘されており、2015年から駅と中心市街地を分断する乙川を有効活用することで一体的に活性化を図ろうと「乙川リバーフロント地区整備計画」が始まりました。その後、集客施設や拠点施設をつなぎ、公民連携で回遊性を高めることでエリアの価値と暮らしの質を高める「QRUWA戦略」が進められています。

昔の乙川では、ボート遊びなど川が親しまれていたのが、いつしか「危ないから遊ばないでね」という場所になってしまい、市の主催イベントで年に数回利用される程度で

した。2015年にハートビートプランの泉英明さんを迎えて「水都大阪」などの事例を紹介いただきながら、使われなくなった川をもう一度使われる場所にしていこうと始まったのが、水辺活動の社会実験「おとがワ!ンダーランド」でした。

社会実験のスキームとしては愛知県からかわまちづくり協議会が占用許可を受けて、施設利用者として運用主体を契約するという体制を取りました。2016年からの最初の2年は市の委託事業として、りたとハートビートプランによる「チームおとがワ!ンダーランド」が、2018年度から3年間は民間事業者が中心となった「乙川活用実行委員会」が主体となって実施し、社会実験期間を終えて、昨年度からは指定管理者としてホームメックスとスノーピークビジネスソリューションズからなる「リバーライフ推進委員会」が運用主体になりました。

1年目は「自由と責任」を掲げて「とにかく使ってみる」フェーズで、夏休み期間の1カ月間に32団体34プログラムが集まり、プロモーションや「夏場の河川敷は暑すぎ」などの課題もあり集客には苦戦



しましたが、上流の額田産材を活かしたベンチの設置や殿橋の高欄を活かした殿橋テラスなど様々な使い方を試すことができました。

2年目は夏場だけでは暑すぎて使えないという反省から実施期間を夏から冬までの6カ月間に伸ばしながら実施しました。その結果、火気使用や宿泊・音出しなど様々な規制があることがわかってきて、禁じるルールではなく、使うためのルールを整理できたことが後に続いてきたのかなと思います。また、期間が長かったことから、朝市やナイトマーケット、星空観望会など定期的なプログラムが出始めました。

3年目は10カ月まで期間を拡張されたことで、四季折々の乙川の変化と魅力に気づくことができたほか、1年目から行われていたリバークリーンの活動にもファミリー参加が増え、川から自転車等が出ると大人はうんざりするのですが、子供にとっては宝物を見つけたように喜び、川の活用の見方が変わっていききっかけになりました。

4年目にはパネルディスカッションにも登壇する岩ヶ谷さんが、乙川の世話人としてリバーベースに常駐して、川を使いたいと思ったらいつでも相談できる体制を整えたことから、いろいろな使われ方がされ

て、結婚式だったり、鯉のぼりの糊落としが行われたりとか、まちなかキャンプ「Let it Camp」もこの年から始まりました。こうして来場者数は3年目が7000人強でしたが4年目で2万1000人になりました。

5年目はコロナ(新型コロナウイルス感染症)が流行し始めた年ですが、屋外でソーシャルディスタンスを確保しやすく、小～中規模のイベントができ、過去最高の2万5000人を記録。その翌年からリバーライフ推進委員会さんに引継がれましたが、非常に集客力の高い自主プログラムを多数展開されており、指定管理者を導入した年はリバーライフ4万9000人強となりました。

こうした経緯を経て、当初は1年ごとをお願いしていた占用許可も実績を積み重ねることで3年間に広がり、今年度から10年という形で愛知県さんから許可をいただけるようになりました。同時に、それまで

活動してきた乙川活用実行委員会、乙川が大好きな市民による任意団体「ONE RIVER」になり、下流域に留まらず、乙川流域全体を対処として活動を続けています。

まとめになります。乙川のかわまちづくりは元々中心市街地の再生の一環で始まり、当初にはぎわい創出を目指してさまざまな活用法を試していて、徐々に開催期間を増やしていくことで、四季折々の魅力やさまざまな活用法などが蓄積されていき、乙川ならではの活用や上下流の連携を試すようになります。社会実験を終えて指定管理期に入り、非常にたくさんの方が来てくれる川になったという意味では川を楽しむ入り口が増えてきましたが、そこからさらに川との関わりを深める活動もONE RIVERを中心に展開されていて、川の関係人口が増えてきています。



第2部 パネルディスカッション

河川空間とまち空間の融合 ～川の歴史の継承と新たな交流を目指して～

コーディネーター



岡崎まち育てセンター・りた
天野 裕 氏

パネリスト



ハートビートプラン
泉 英明 氏



(株)スノーピーク
ビジネスソリューションズ
村瀬 亮 氏



ONE RIVER
岩ヶ谷 充 氏



あいち橋の会
宮川 洋一 氏



草木染作家
イラストレーター
唐澤 萌 氏



愛知県建設局河川課
杉谷 正樹 氏



第2部パネルディスカッション「河川空間とまち空間の融合～川の歴史の継承と新たな交流を目指して～」に入ります。大まかな流れですが、あまり筋書きなく進んでいった方が面白いかなと思うので、皆さん自由に発言していただきながら、これからの活動をどうしていくかということも併せて会話を深められればと考えています。パネリストの皆さんに「私と乙川」というテーマで写真を用意してもらっています。最初はONE RIVERの岩ヶ谷充さん、用意した写真の説明を交えながら自己紹介をお願いします。



ONE RIVERという市民活動団体の岩ヶ谷と申します。乙川にはプレイヤーや民間事業者として関わるというより、企画を運営する側で、乙川で事業をする方々に寄り添って一緒に活動をつくっていく、という立場で2017年から関わらせていただいています。僕が選んだ1枚は、2018年10月28日に撮った写真です。当時はおとがワ!ンダーランドとして3年目、行政からの委託が終わってここからは民間色を強めて事業性を高めようという時期でした。乙川の水位は矢作

川合流点にある乙川頭首工において年間で操作されていますが、舟運の事業者や水上アクティビティ、SUPの事業者から、より継続的に、経常的に事業を行うために「年間で水位を確保できるように」と言われ、できるかと悩んでいた時期でした。そんなときに乙川に行ったときの写真で、水位が下がって現れた砂浜で子どもたちがビーチフラッグスで遊んでいて、「ああ、何て一方的な考え方で川を捉えていたのか」と気付かされた瞬間でした。このときの気付きは「あるものを変えるのではなく、今ある状況で何ができるのか、この場所だから何ができるのか」ということです。今、ONE RIVERという団体でそうしたことを大切にしていますが、大切にす



2人目はあいち橋の会の宮川洋一さんをお願いします。宮川さん

はたくさん写真を用意してくださったので、僕の方でいくつかセレクトしました。



宮川洋一といいます。岡崎生まれの岡崎育ちで約27年前にまちづくりがしたくて愛知県庁に入りました。道路や橋を造ったり、直したりする仕事をしていて、橋の設計や施工に長く従事しています。「あいち橋の会」は県職員が技術継承のために作った組織です。ただ、さらに橋を切り口に、仕事の枠を越えて活動したいと考えています。乙川との関わりは、岡崎市制施行100周年の際に、僕が殿橋の設計・施工を担当していたことがきっかけで、まちづくりの仲間と出会い活動しています。



今は桜城橋ふきを行っています。きっかけは殿橋洗いです。殿橋洗いの活動は、歴史ある殿橋を担当した際、多くの人に知ってもらい、誇りに思ってもらうことにより、次の世代へ大切に引き継いでく

れるのではないかと始めました。活動の中で、乙川の水を掛けて、たわしでこすってやると、なんとも言えない愛着が生まれることに気が付き、その経験から桜城橋も愛される橋になってほしいと思い、こちらは木床板なので「額田の森に思いをはせて 桜城橋ふき」をやっています。毎月第4土曜日午後5時から行っています。雑巾1枚で参加できますので、都合が合うときにご参加ください。



用水は井戸から、排水は脇の沢に流され集落の川に流れ込みます。「川と遊ぶ」と考えたことはなく、沢がインフラです。我が家の犬は毎日散歩でこの川の水を飲みます。なので「本当に使うものに気を付けよう」と思う近さがあります。集落の人たちと仲良くするための共通言語が欲しくて移住した当初から田んぼを始めました。凄く水と関係の深い農業なので、これを通して私は水と深く関係しています。



中で環境問題に企業が関わらないといけない、地域の交流も大切になってくる、そして、チームワークと創造性といったものを養わないと企業は存続できないということに直面します。そこで、IIと真逆のアウトドアは全ての条件が入っているのではないかとピンときて、2015年くらいに、企業としてスノーピークの商品を大量に購入し、さまざまな活動を始めました。せっかくある資材を使って岡崎市内で何かやれないかと考えたところ、おとがワ！ンダーランドの企画があり、受け入れていただいたので、「我々ができることをどんどんやろう」と新しいイベントを企画しました。その時のイベントが、全国各地から岡崎という地方都市の可能性を感じ、いろいろ語り合おうというもので、今は「Local Work Tourism(ローカルワークツーリズム)」という名前で進化しています。写真は岡崎が発展していく可能性があるまちだと全国に知っていただくというときのものです。乙川はとても可能性のある場所で、さまざまなことを身近に感じます。今まで企業とまちや市民がそんなに関わりはなかったが、これからは密接に関わりができるだろうと、やはり現地に行ってみないと分からない限りは普及活動にもつながっていかないだろうと、考えていたところだったため絶好の場所でした。外の空間というものがいかに優雅で、そこで人と人が触れ合うことの可能性を提供できるような、そんな役割として企業の方にたくさん知ってもらおうという活動をしています。



 宮川さんの熱い思いとともに額田の森に思いをはせ、唐澤萌さんに行きます。唐澤さんは額田、乙川の上流部にお住まいということで、暮らしのルールなどについてもお話しいただけたらと思います。

 先ほど話しのあった「乙川の下流域」と比べると、川と暮らしとの距離感が全然違うんだと改めて実感しました。続いてはスノーピークビジネスソリューションズの村瀬亮さん。アウトドアオフィスなど、上流から下流まで幅広くフィールド展開しながらいろいろ事業をされているといった文脈でお話しいただけたらと思います。

 唐澤です。出身は神奈川県ですが、8年前に夫がこの近辺の山で「林業をしたい」と言い、結婚を機に岡崎市の乙川上流の千万町町に移住しました。写真は千万町の集落の中心を流れる川です。千万町の集落は川に沿って走る県道沿いに家が点々とある細長い集落で、大抵が山の麓、斜面の下にあります。上下水道のない家に移住したため、生活

 村瀬です。スノーピークビジネスソリューションズは岡崎生まれ岡崎育ちの私が20年程前に立ち上げたII企業と、スノーピークとの合併会社です。II企業をしていると、さまざまな社会課題や世の中の変化に敏感になり、その



スノーピークビジネスソリューションズさんのスノーピークギアが使われたことで屋外空間での会議がやりやすくなりました。社会課題や地方都市の問題と実は密接に絡んでいるといった話もありますので、その原因を後ほど詳しく伺いたいと思います。続いては第1部で事例紹介をしていただいた愛知県建設局河川課の杉谷正樹さん。



先ほどの事例発表に続きまして杉谷です。「私と乙川」と言って紹介したいのはこの写真。平成29年12月に行われた「ブラアイチ」というイベントです。



栄えある第1回で、川だけでなく、地形や地域の文化、歴史など、まちの成り立ちを勉強してもらうことにより、防災などにまで視点を広げて地域を知ってもらおうという企画です。第1回は手探りだったと聞いていますが、地域の皆様の熱い思いか、かなりの人数が集まり、しばらく参加人数第一位をキープしていました。「ブラアイチ」は、年に1、2回、多くて3回くらいあり、来年度以降も引き続き取り組んでまいります。ご参加いただければ幸いです。



ブラアイチは、川の成り立ちとか地形、防災までとありましたが、本当に川を知ることができ、そして、いろんな活動を結びつけていくという意味では大変重要な活動なのではないかと思ひ、僕も参加させていただきました。また後ほどそのあたりのお話もお聞きします。



1枚目の写真に見た人がいました。



宮川さんですね。宮川さんが第1回の最初の場所で殿橋を説明しています。最後になりますが、ハートビートプランの泉英明さんです。ごくごく初期から「頼れる兄貴」として助けていただき、今日もお越しいただいています。



ハートビートプランの泉です。大阪から来ています。ハートビートプランという都市デザイン事務所ですが、個人的にも川が大好きで、全国さまざまな場所に行っています。大阪でどのような活動をしていたかという、大阪も川に背を向けた街でしたが20年ほど前から「みんなでその川を使っていこう」という話になり、川沿いのオーナーにさまざまな提案をしてテラスを造って「そこでうまいビールを飲める空間をつくらうぜ」みたいな活動などを行っています。皆さんもされていますが、いろんなアイデアを市民や企業の方と話をし、どんどん使っていくことで、全く使われてない川がだんだん生まれ変わっていくことを体感しています。岡崎で天野さんに声を掛けていただき、最初に乙川を見ましたが、ほんまに誰もなくて「こんなまちのど真ん中にあるのに、こんな素晴らしい場所でお城も見えるのに」と思いました。この写真は

おとがワ!ンダーランドでアイデアを出し合っているところで、「実際にやってみちゃおうぜ」というところからスタートしています。ですが、難しいことを言ってもなかなか分からないし、私自身が乙川とどのような関係がつかれるのか、どんな楽しみ方ができるか分からなかったので、一緒に来ていた息子と一緒に川に入ったんです。岡崎の人は「え、こんな汚い川に入るの?」という反応。こういうことを行う横でさまざまなアイデアを持ち寄り、イベントをやるというよりは、「どういった川との関わり方や楽しみ方などを日常的にできるか」ということをしはじめたので、僕にとっても非常に思い出深く、ここの川に取り組んだのは非常に良かったと思っています。



泉さんがいきなり飛び込んだときは僕もびっくりしました。岡崎市民からすると乙川で泳ぐのは当時だと考えられないことで、「うわ、乙川に入るの?」と思ったのと同時に、「乙川は泳げない川だ」と思い込んでいることにも気付いて、二重にびっくりした覚えがあります。今となっては、入る若者や子どもとかが増えてきて、そのパイオニアが泉さんだったと思います。これで6名の方に自己紹介をいただきましたが、早速本題に入ります。岡崎の場合はいろんな活動が川に関わるきっかけになっているなど感じていますが、杉谷さん。河川管理者としての

んな使われ方をするというのは、結構怖いことなのではないかなと。実際にそういった川で活動をされるということに関して、どのような変化があったのかお聞かせいただけますか？



こうしてたくさん川を使っていたら、川に興味を持ってもらうという点で、現状は非常に良い状況だと思います。最初はこういった活動をするのか、使う方も許可する方も手探りで、こういった活動をするのかを両方が認識して、すり合わせた結果、こうした形になっているのかなという認識です。



ありがとうございます。殿橋テラスのように、仮設とはいえそれなりに長い期間、河川区域内にモノを造るに当たり、岡崎市と愛知県の間でかなり綿密な協議がされていたと見ていたのですが、川の水位が上がっていったときの怖さ、みたいなものは、始める前は正直そんなに認識していませんでしたが、実際に水位が上がると、河川区域の中を使うという怖さを思い知りました。そういった所を民間側も認識したり、そのリスクに備えるっていう意味で、何年か掛けていく中で信頼関係が築けてきたのかなと思いました。



当初の信頼度合いは？



信頼度合いというよりは、こういった活動をされるのかというのがなかなか認識できなかったのではないかと思います。



泉さんから見て、乙川のかわまちづくりはほかの所と比べてどう

いった特徴があるんでしょうか？



対象もプログラムのジャンルも結構幅広いと思っています。水都大阪で行っているのは都市部の河川なので、唐澤さんの言う、ああいう場所ではないんですね。なので、商業的に寄りがちで、なかなか自然系のプログラムができない。「山とつながる」なら淀川の上流になるため、なかなかできない。別の所では都市がない。岡崎はそこが両方できているところがとても珍しいと思います。プレゼンを拝見しても、岡崎はマーケットも上下流の連携もやっていて、これは非常に珍しいことで、そうした活動がこういった所で話をされているというのは非常に面白いと感じています。



岩ヶ谷君、この5年間で、活動の幅が広がったとか質的に変わってくるころがあったのかな。さっきターニングポイントの話もありましたが、どういところで活動が変化したとか、広がったみたいな話がありますか。



鮎ですね。最初のおとがワ！ンダーランドはもう少し商業的でした。2018年、とあるプロジェクトの別の機会、漁協さんにお会いする機会があって、漁協の組合長から直接鮎の話を知りました。実は僕らが普段あそこで「マーケットを！」とか「事業を！」と声高に

言っているあの水面では、鮎が泳いでいる時期があるっていうのを、その時に聞いて「はっ、そうなんだな！」と。鮎が存在しているっていうことは知っていたんですが、実感をもって知ってはいなかった。一気に視野が広がった。川を点で捉えていたのが、流域という川の流れ、全体につながっていきました。上流部のことも、人間以外の生き物のこともそうですし、意識を向けて活動をしていくことが必要だと思ったので、今の話がきっかけになるのかなと思いますね。



それまでは川をフィールドみたいな感じで捉えていたのが、川自体に関心が向くようになった、変化が起きてきたというのが、鮎の話ということでした。先ほど宮川さんから、橋を実際にふいたり洗ったりしていると感覚が変わっていくというような話があったかと思うんですが、参加者の声や、どんな人が参加しているかといった所を教えてくださいませんか。



やってみて分かったことがたくさんあって。橋って川の上に掛かっているんで、「橋の上って川の上なんだ」「遠くまでこんなに見渡せるんだ」っていうことだったり、「あ、風が吹き抜けるんだ」ということにも気付きます。参加者はお年寄りから子どもまでいて、裸足になってふいているんですが、ヒノキの床板から温もりが伝わってくるということにも気付いま

す。参加者に額田の森でヒノキ材を出した人もいて「こんなにたくさんこの橋に関わっているんだな」と気付きます。岡崎の約5割の人が乙川の水を飲んでいたり、上流がちゃんとしていると、水害も少なくなること、川の増水も抑えられることなど、川に関する知識を橋上教室（橋ふき後に桜城橋で行う講座）で、さまざまな人から教えてもらっています。上流と下流とのつながりなど、たくさんを知り、そういうものがうまくいって僕らの生活があるんだなということに気付きました。



鮎の話や川の話って、何となく頭では理解していることだと思うんですが、村瀬さんは実際に外に出ている体験を通じて、というところに、ビジネスを絡めようとしている。そこに何か関係があるような気がしていますが。



結局企業の課題というのは、まちの課題でもあり、人の課題でもあり、地球の課題でもあり、分断されてるものではないと思っています。それこそ、桜城橋をみんなで掃除すれば、そこで結束力、つながりなどができる。企業も今そういうことがとても大事になってきているというわけですね。分断から共創、いっしょに創る。きっかけが必要ですが、あまり説教じみたものだと伝わらないと思い、楽しくみんなが理解するっていうことができたなら企業もまちも発展し、良いことばかりじゃないかと思ったんです。少しでも多くの方が参加する機会や場を提供できることが、我々にできるのであれば、それは我々にとってもメリットがあるし、そこに参加してくれた人と新しいチャレンジができる。ということをやりたいなっていうのが、原点ですね。



そういう意味では今、乙川で行われている研修の風景は、まちがフィールドになって学ぶ場で、交流する場でもあり、そういうつながりをビジネスでも行い、さまざまな市民活動ベースでもつながっている。それは事業の大小、営利非営利なども関係なく、面白いことをつなげていく、というようなことが起こってきているんだなということがよく分かりました。さまざまな切り口で川に関わるということが今、岡崎では実現してきていると思いますが、ここで、実際に川との関係を深めるという意味で、唐澤さん。上流部で起こっていることや課題は、何がありますか。



まず昨今の大雨。岡崎は幸いにもそこまでここ数年大きい被害が出るような雨はないですが、それでも何回か夏場に恐怖を覚える大雨があり、そのたびにうちの裏山に流れる沢が、いつもチョロチョロ流れているくせに、その時は寝れないくらいの轟音、爆音を立てて山から流れてくるんですね。そうすると人間の本能的に「やばい」というスイッチが入って、寝られるけど、ずっと耳は起きている。「土砂災害の前触れに土の香りがする。小さい小石が落ちてくる」とよく言われますが、嗅覚と聴覚でずっとそれを探りながら、目は閉じて寝ているって状態なんです。その翌朝起きてみると、沢の先にある、畑と田んぼにつながる用水路が、山から流れてきた土砂で埋まっているんですね。そうすると田んぼに水が入らなく

なる、もしくはあふれて全てが水浸しになる。用水路に面している田んぼの地主が集まって掘り起こします。毎年ある作業なんです、大変な重労働です。移住してきた年は50代後半、60代後半の人が集まっていたんですが、今は関係者が70代後半。あと10年後、「シャベル持って集まってくれているこのおじいちゃんおばあちゃん、いなくなるよね。この集落の土木、治水、インフラ維持、どうなんのかな？」ってなります。どうなるも何も、立ちゆかなくなるという答えは出ていますが、こら辺でいつも、思考を止める癖が付くぐらい、もう、なるようになるしかない。そういう問題を抱えてますね。倒木もありますし、土砂災害は毎年のように起きていて、生活にも命にも直結していると思って暮らしています。



実際社会的な課題が、かなりリアルに迫って見えているっていうことに対して、岩ヶ谷君から「話させる」というサインが飛んできたので、岩ヶ谷君、どうですか？



上流側の社会課題を話していただき、最初のところで、自分達は浄水施設とか行政施設を介さないが故に、直接自分たちが使った水が直接流れていくから、水に対して緊張感を持って接している、雨が強く降った時に、嗅覚と聴覚を全開にして寝る、考えても考えて

も立ちゆかなくなっていくことが分かるから、意図的に思考を停止すると言われていたが、まちなかに起こっている課題と全部逆だと思いました。安全になるのは良いことですが、そのありがたみや、この水がどこから流れてきているかということも薄れてきているという感覚もある。



写真提供: 杉浦葉津子

この写真、危ないですね。このときに、萌さんみたいに「ああもう来るぞ」となった人が何人いたかと考えた時、僕は「川が安全である」ことが当たり前になりすぎてしまって見えなくなっている。だから、無意識に思考が止まっている。僕は、それが川へ対しての課題となっていると感じました。



愛知県の杉谷さん、こういった危険は、まさに公共が一番、神経をとがらせている所だと思いますが、一方で岩ヶ谷君が言ったみたいに、市民の側からするとどこか何か遠い話のように感じてしまっているというような、ギャップみたいなものはどのようにお考えですか？



やはり、裏腹と言いますか。改修が進めば安全になりますが、その分皆さん「大丈夫だ」という意識がどこかに出てきて、危険なときも逃げなくなるという傾向が多分あるんだろうと思います。そうしたことが、さきほど中部地整さんからも紹介があった通り、昨今雨の降り方

がずいぶん変わってきて、非常に危険な雨が毎年のようにどこかで降っているというのが、我々も危惧しているところでございます。一方で、川辺に関しては最初に申した通り、興味を持っていただくことで気にするきっかけになると思います。つまり、常に川に興味を持っていただくことにより「あ、きょう雨降ったけど水位どうなっているんだろうな」というように気にしていただけるということです。我々としては、水位の情報などをウェブなどで皆さんに発信していますが、1つ、取り組みを紹介させていただきます。「みずから守るプログラム」というのを愛知県でも取り組んでおりまして、これまで岡崎市さんでも3地区で申込みいただいているところです。平たく言うと「これだけ雨が降ったら、我々逃げなきゃいかんのかな」といった1つのきっかけを実感していただくと。近くで雨が凄く降って、近くの水路があふれ出したら危険じゃないとか、そういったものを地域の皆さんで話し合っただけで逃げるタイミングなどを実感していただくという取り組みをしておりますので、機会があれば応募していただきたいと思っております。



泉さんは、防災もありますが、公民連携というテーマでずっと取り組んで来ていますが、今後どのような形で、例えば流域治水みたいな考え方とか、まずは興味を持ってもらう、何か活

動を始めるというその先の接続先というのが、上流の社会的な問題だったり、あるいは環境的な問題、こういった河川の氾濫みたいなものを意識せざるを得ないと言えるような局面に来ていると思うんですが、今後の活動の方向性、ヒントみたいなものを教えていただけるといいかなと思います。



今お2人が話していたのはホンマにそうだなと思って、難しいんですね。河川管理者は安全にしなきゃいけない。どんどん安全にしていけばいくほど普通の市民の危機意識が下がるし、そのバランスって難しいですね。でも、例えばさまざまな災害が起きていますし、津波もありましたし、その復興のまちにも私は最近行っていますが、やっぱり、ある程度ゼロリスクではない、逆にそのリスクをもう少し上げてくれるというのは行政から言えない。例えば全部防潮堤が築造されてしまうというような計画だったところを、それを下げて海と自分たちのまちをどういう風に近付けるか「やっぱり今までの私たちの暮らしているのはそれが前提なんです」って。「それがもし来たときに私たちは逃げられるので、それは解決するんです」っていうところと、そうじゃない所には全部防潮堤が建っている。そういうことをできるのは、やはり地域側でしかないし、地域側も災害の時には五感を張り巡らせてとか、代々避難するっていうことを子どもたちに伝えていくとか。そういうものをちゃんとできる地域はそういうことが実現できている。僕は、元々土木って結構でかい話なので、1人の意見とか地域の意見で土木の構造なんて変わらんと思っていたんですけどね、違うんですね。もう、地域ごとで堤防

の形とか、市街地の形も違って。「ここはもう住まない」って諦めてしまったところ、諦めずに「私たちの住む町」ってのはどういう風に海とか川とつながったりとかっていうのを真剣に考えて、こんな最終的に土木の形が変わってくるのかっていうのを再認識しました。それはなぜそうなったのかなって思ったのは、日頃の生活の中で使ってるとか、関係性が普通にあるから。なので、乙川もそうかもしれないですけど、何か災害があったら一気に復興とか、対策の圧力が掛かってきて、バンバンって造られてしまうのが普通。日ごろの付き合いのあったところと無いところで復興後の姿が全く違ってくるんじゃないかなというのあって、上流と下流というのがあると思いますし、そういう関係性が既にできていると多分違う解決策がある。ここだけじゃなくて、森の方も何かやろう、対策があるかもしれないし。そのいろんな世代も子どもたちもこういう風に親に連れられて、橋洗いとかいろんなことをやっている、そこもまた解決方法が違ってくるんじゃないかなと。一発逆転の方法はないと思いますけど、日ごろからの使い方とかが大切かと思えます。



今のお話ですけど、気仙沼とか東日本大震災でやっぱり災害が起こったところで防災に勝る論理というのはなかなかなくて、そうすると、かなり高い防潮堤を造っていくというのがオーソドックスな復興になっていく。ただ一方で歴史的に持っていた海の関係っていうものが切れてしまうようなところが、その高い防潮堤を建てるのが唯一の策ではないんじゃないかみたいところで、何を優先するかが認識されているものによ

て多分、違ってくるというようなお話だったかと思うんですが。



そうですね。やっぱり地域の中でも「もっと安全にしてほしい」っていう人も絶対いる。関係性が大事だということも、地域の中でも違うんですね。一人一人意見が違う中で、全体がやっぱりどうなっていくのかっていうのは、やっぱり日頃の関係性かな。



でもそれ、先ほども岩ヶ谷君ですかとか杉谷さんも触れてましたが行政側がそのリスクを設定して、それを管理するものであるとしたときに、市民側がその意識が薄くなってしまいうというデメリットみたいなものも生まれてしまうかもしれない、というお話だったと思うんですけど、だとすると、我々ができる事はひょっとしたらまた違うことなのかなと。乙川ってこういうものが大事だよっていうものを探ること、みたいなものにつながっていくのかなと思って、今話を伺っていました。と言うような流れで今、かわまちづくりの関係人口が広がって、それが今度深めていく先としては、やはり上流域の生活だとか、あるいは防災みたいなものとどう接続していくかっていうようなところに来ている部分で、もうそろそろお時間が迫ってきつつあります。最後に、今この話の流れも踏まえつつ、これから私たちがこの川に対してどんなことができる



のか、あるいは、していけるのかということらを皆さんに1言ずついただいて、閉めさせていただきたいと思います。



自己紹介のときに田んぼやってるって、それが上の世代の方と私の共通の言語を獲得するためって言ったんですが、もう1個の目的として、縦軸が年配の方と若い人の交流の場、横軸として、まちと山村の暮らしの人たちとの交流の場として、その交点として田んぼが良いんじゃないかと思って始めたんですね。ですが私、交流を自らするタイプじゃなかったという最大の欠点があり、地域ではたいした爆発力もないまま1枚の田んぼを肅々とやるっていうので終わっているんですね。で、結局、何が必要って、人をつなげてくる人とか、もっと大きい視野で物事を見て、語る人が必要なんだというのが、とても身にしみたんです。なので、外者として移住してきたにも関わらず、8年経ったらすっかり田舎マインドが染みついてきて、内にこもるマインドになりつつある私はもうだめなんで、ぜひ、これからは山村・山間部に人を呼び込んで、川を通して地域全体の課題解決に取り組む、今日の課題を共有するためにも、「エイ！」って人を巻き込んでくれる人に山に来てもらって、面白いことを一緒にして、遊んでくれる人をもっと呼び込んでもらいたい。私のしたいことじゃなく、任せたいことです。



僕は橋ふき始めて3年目なんです。で、どうやってやったらいいかというのが分からずずっと続けてきたんですが、続ける事によっていろいろ見つけることがあって、みんな橋も自分のことだとか、いろんなことが自分事になるよう

な変化が生まれてきたような気がして。あんまり偉そうなこと言えないんですけど、ここでずっと続けていこうかなと。で、20年後にヒノキを貼り替える必要があると聞いたので、それまでずっと続けてこうかなという風に思っています。



● 僕ね、やっぱり川が大好きなんですよ。なんで好きなのかって言ったら、川は利害が一致してないからだと思って思うんです。考え方が違う人たちが同じ場所に常にいるからだなと思っていて、安全性と市民の危機意識の低下のアンバランスみたいなものもそうですし、人と触れ合う必然性みたいなのが生まれるから、僕は川が好きなんだなって最近思うようになって。そのアンバランスゆえに僕も一発逆転はないと思っていて、だから何をしようというか、柚谷さんが言ったように「川を好きになる」っていうことが大事だなと思います。皆さんもせっかく岡崎に来たんで、乙川を見ていただいて、

「あいつらが好きな川はどういう川なのかな」という風に目を向けていただけるといいかなと思います。



● 地にも川にも山にも空間を設計してですね、ほかの人が集まるような場をつくるということをこれからやっていきたいと思っています。



● 月並みではありますが、「安全に」ですね。洪水とかの安全に配慮いただいて、十分川を利用していただいて、好きになっていただくということが大切だと思います。引き続き皆さんの活用をよろしくお願いします。



● 僕はなんか自分が何かっていうわけじゃなくて、さっき村瀬さんが「場をつくる」と言ってましたけど、みなさん、場をつくったりとか人をつないだりとかっていうのをむっちゃ楽しそうにしてるから、これが岡崎の価値だなと。で、こういう変な大人が増えないと、面白くないと思うので、素晴らしいと思いました。



● 川とどのようにこれから付き合っていくのかといったところを、関

係人口という切り口をテーマに話をしてみました。つまるどころ、皆さんがこうして楽しそうに語り、でも、一方でその先にはいろいろ課題があるっていうのを共有しあっていって、やっぱり今、みんな見えてないものを共有し合うっていうのが多分この川への関心をどんどん深めていくっていう結果になるんだなということをあらためて思いました。なのでまた、今日、お時間が許せば、川の方でこの延長戦ができればと思います。





サミット宣言

サミット宣言～閉会式



サミット旗授与



「第30回全国川サミットin岡崎」は、主催自治体である中根康浩岡崎市長により高らかにサミット宣言が読み上げられ、川の果たしてきた役割や恵みなどについて、理解を深め、これからも人と人とのつながりを越え、川に関わる人々の交流の輪を広げていくことを誓いました。

続いて、中根岡崎市長から次回開催地の滋賀県守山市の木村勝

之環境生活部長へサミット旗が渡され、木村部長から次回開催に向けた意気込みや多くの方々のご来訪を期待する旨のご挨拶をいただき閉会しました。

また、参加自治体の一部関係者は会場となった岡崎市図書館交流プラザ(りぶら)から徒歩で乙川に接続する伊賀川河川敷を歩き、乙川との合流地点付近から木舟で約

1キロ東にある名鉄東岡崎駅近くの舟着き場へ向かう「舟運」を体験しました。乗船された皆様は、舟の上から乙川の豊かな自然や、乙川河川緑地でこの日行われていた「岡崎城下家康公秋まつり」の市民でにぎわう様子などを確認されてから帰路につかれました。

次回開催地：滋賀県守山市



第30回全国川サミット in 岡崎 共同宣言

中央アルプス南端の長野県下伊那郡大川入山から三河湾に流れる全長約118kmの一級河川矢作川は、江戸から明治にかけて三河地域の物流の動脈として舟運が発達し、流域には20余りの荷物の揚げ降ろし場が設けられるなど、三河地域の発展に大きく貢献してまいりました。

中でも、矢作川中流域にある支川の一つ、一級河川乙川には、「五万石でも岡崎さまは、お城下まで

船が着く」と民謡に唄われるように、岡崎城の眼下に舟運の要所として土場が設けられ、これが東海道と交わることから、岡崎城下は交通の要所として繁栄してきました。

かわまちづくり事業による河川空間の活用が、まちの新しい風景としてまちの魅力を高め、まちの賑わいを創り出すと共に、川がつなぐ上下流の地域の営みや、川がもたらす豊かな資源を守り、活かす活動に関わる「川の関係人口」を耕してい

くことを実感しています。

「第30回全国川サミットin岡崎」は、徳川家康生誕の地、岡崎市を会場に、「河川空間とまち空間の融合ー川の歴史の継承と新たな交流を目指してー」をテーマとして開催しました。

今も昔も、流域に住む人々に恵みをもたらす続ける川の大切さを再認識するとともに、次世代に向けてより良い川との共生を図っていくことを誓い、ここに宣言します。

- わたしたちは、先人が築いた、恵みをもたらす川の歴史や文化を守り、次世代へ引き継いでいきます。
- わたしたちは、災害から命や大切なものを守るため、防災への意識を高め、災害に強いまちづくりに取り組みます。
- わたしたちは、川とのふれあいを通して、ひとりひとりが川に興味を持ち、大切に守ることで、川を愛する豊かな心を育みます。
- わたしたちは、川と共存した美しいまちなみと、多種多様な生き物が生息する豊かな自然環境の保全に努めます。
- わたしたちは、人と人とのつながりを大切にし、自治体の境を越えて、川に関わる人々の交流の輪を広げます。

令和4年11月5日 第30回全国川サミットin岡崎 参加者一同

参加自治体

秋田県 横手市
岩手県 一関市
福島県 湯川村
山形県 鮭川村
群馬県 みなかみ町
東京都 江戸川区
愛媛県 大洲市
宮崎県 宮崎市
愛知県 豊田市
愛知県 安城市
愛知県 西尾市
愛知県 碧南市

第30回 全国川サミット in 岡崎

「河川空間とまち空間の融合・川の歴史の継承と新たな交流を目指して -」

主催：全国川サミット連絡協議会、岡崎市（第30回全国川サミット in 岡崎実行委員会）

共催：一般社団法人中部地域づくり協会 後援：国土交通省中部地方整備局、愛知県 協賛：矢作川改修促進期成同盟会

事務局：岡崎市 共同事務局：公益財団法人リバーフロント研究所



河川 公益財団法人河川財団による
基金 河川基金の助成を受けています。